

人物
クローズアップ

宗教学、民俗学、日本思想史を熱く語る。心のかかと思えば、詩を作り、和歌を詠み、ギターをかき鳴らしてシャウトする。フリーランス神主、「神道ワンクライター」を名乗る異色の宗教学者である。多彩な研究者が集い、2009年4月に発足した京都大学（KUP）の未来研究センター（FRC）の教授を務める。近著「細沢 古事記」(シマヤ社)では、その原典を踏襲したとされる神田明礼になりきり、日本神話を語りおろした。

宗教学者 鎌田東二さん 58



展覧会「物からモノへ」の会場（31日まで）。「万葉集のようなモノの世界に迫りたい」と鎌田東二さんは語る（京都大総合博物館で）＝山口寛人撮影

世直し、心直しのモノ学

「世直し」は、世にされたりもせず、されられ、こころいふありまが、僕達でいては保守本流なんぞで」

鎌田東二さん（幼い）とオニを見た記憶が原動力であるという。17歳の時から40年以上、国内外の聖地を巡り続けている。即興的な詩作や歌、語りは、「神に祈る、捧げる」という気持ちで行っている。

そんなアーティストックにして実践的な学問人間の集大成として、新たな

学問領域「モノ学」を提唱する。「モノ」という言葉をたよりに、日本人の精神文化を解き明かそうという試みだ。

「モノ学・感覚価値研究会」を主宰。人文科学、自然科学、工学を幅広い分野の研究者に加え、日本画や現代美術、工芸、デザインなどのアーティストら35人と06年から共同研究を行ってきた。その研究成果が昨年12月、論文集「モノ学の冒険」（編者 創元社）

としてまとまり、「モノ学・感覚価値研究会」が発足する。

「ものゝへり」という、物、物思い、ものすてい、物々しい、物の怪、物忌み……人間の心や精神活動にかかわる重要な語句の多量な「モノ」がつづき、それらは何を意味するのか。「源氏物語」から、現代の自動車作り、ロボット作りまで展開する日本独特の「モノ」感覚。物に魂が宿

り、無生物にも心通さふらねるといふ、目に見えないモノの気配。それに触発されて、物語やアートが生まれる。そんな身体感覚を伴った日本人の心性は、「物質としての「物」、人間性としての「性」、霊性としての「魂」という三つの位相が響きあい、グラデーションをなしている」と語る。

かつては呪術やアニミズム、素朴な信仰が、霊的なモノの世界を担っていた。霊的なモノは近代以降、うさぎやささきをもって扱われるようになった。しかし、物質的次元だけで世界をはかろうとするのは、あまりに平面的ではなか。そうした問いが、モノ学から浮かび上がった。

目の前にあるモノとのかわり方を問うことは、モノの見方、生き方を問い直すことにほかならない。それは、自然に対する畏怖・畏敬の念を取り戻すこと。自然と人為のバランスを創造的に維持していく知恵。「生感悟」を回復せよ、という呼びかけなのだ。

「モノ学」は世直し、心直しの社会運動でもあるのですよ。その力を込めた。

（西田朋子）